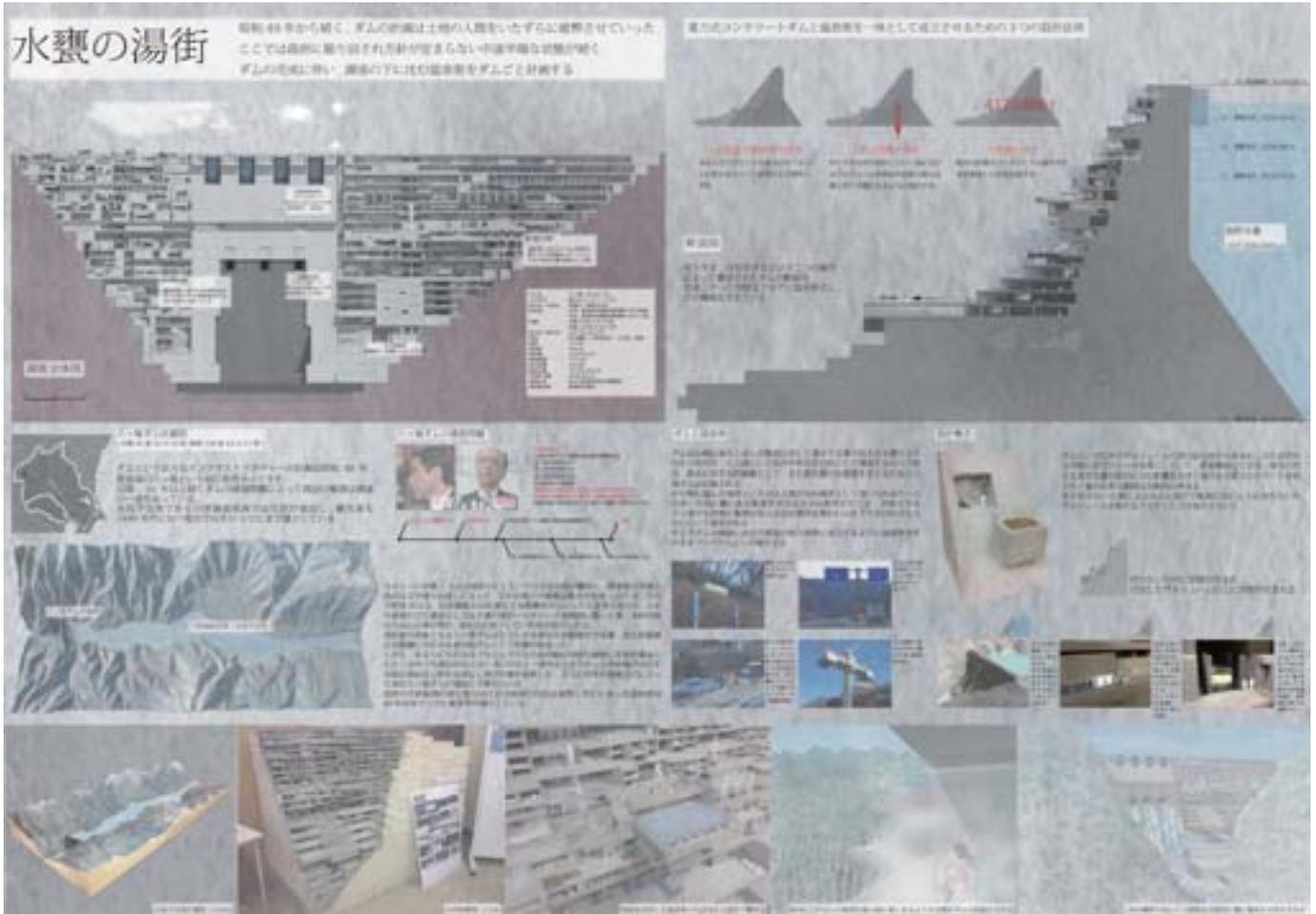




市民賞

# 水甕の湯街

吉原 環 (よしはら たまき)  
千葉大学 工学部 建築学科



昭和49年から続く、ダム計画は土地の人間をいたづらに疲弊させていった。ここでは政府に振り回されなかなかな方針が定まらず、中途半端な状態が続く。ダムの完成に伴い、湖面の下に沈む温泉街をダムごと計画する。

インフラストラクチャーが土木的建造物によって整備されているため現代の日本では生活が安定している。

一方でその巨大さゆえに莫大な土地を必要とするため、住民は政府の方針のもとに立ち退きや移住を余儀なくされるという現状がある。

生活の安定を整備する裏側で犠牲になる人々を生み出してしまう巨大な土木的建造物を、建築的に扱う事で、犠牲の側面をなくす事ができないかと考えた。



### 講評

政治的背景から揺れるハッ場ダム建設の計画により、その土地に古くから暮らす住人は、出来るか出来ないのかわからない曖昧なダム計画に長年に渡り振り回され、事実上の故郷不在の状態が続いている。この作品は、住民たちの生活を未来に一步進めるためダムの計画自体をダムの機能を併せ持つ新たな温泉街として作り上げようとした迫力の提案である。

垂直方向に展開する温泉街の風景は、その場所できか体験できない固有の温泉街をつくる可能性が多いに見受けられる。湯気や臭い、温泉や人の流れが立体的に展開する魅力的な風景が容易に想像できる。同時に、ダムがつくる圧倒的な風景は、一度は行ってみたいと想像させられると共に、他にない温泉街として差別化された魅力をうまく作り上げている。作者は、ダムという巨大な土木構築物をいかに既存住人に受け入れさせるかという思考からダムの新しい表現としてこの温泉街を創り上げたが、ダムに引きずられすぎず、新しい魅力的な温泉街の提案として表現していれば、さらに作品の魅力が伝わり高評価を得られた提案であったと思われる。

(審査委員：佐々木 達郎)